



かんすい

日本水環境学会関西支部ニュースレター

No. 3 (2000年9月1日発行)

— 編集・発行 —
日本水環境学会関西支部

— 連絡先 —
草津市野路東1-1-1

立命館大学理工学部環境システム工学科
Tel: 077-561-2742 Fax: 077-561-2667

支部企画 市民シンポジウム (9月13日)

『水環境問題における研究活動と市民活動の役割』 ～学会とNGOに何が求められているかをテーマに討論～

シンポのねらい コーディネーター 兵庫県立公害研究所 古武家善成

文部省科学研究費の補助を受けた支部主催の市民シンポジウムが、別記のように、9月13日(水)13:00～17:00に摂南大学寝屋川キャンパスで、水環境学会シンポジウム(9月13～14日)のサテライト会議として開催されます。科研費の補助を受けた支部市民シンポジウムの開催は、97年度(阪神・淡路大震災関連、神戸市)、98年度(琵琶湖・淀川水系関連、立命館大学びわこ・くさつキャンパス)に次いで3回目になります。今回は、「水環境問題における研究活動と市民活動の役割 - 学会とNGOに何が求められているか - 」というタイトルで、学会・研究活動と市民活動との協力関係やその社会的使命について大いに議論します。

新しい世紀を迎え、水環境問題の解決のために市民が果たす役割は、研究者の活動とともにますます重要になっています。しかし、研究者と市民はこの問題の解決に向けてどのように連携していくのか、学会の役割はいかにあるべきかについて、両者の考え方は必ずしも一致していません。研究者の側は、環境NGOの活動を評価しながらも、活動が感情に流される場合がある点や“勉強”不足の点が気になっています。一方、NGOの側も、学会・研究者が“中立”の名の元に環境問題の社会的側面に十分関わらないことや、市民の方に十分顔を向けないことに不満を持っています。そこで、研究者と市民が一堂に会し、学会活動やNGO活動のこれまでの歴史を踏まえながら、双方が互いに求めている役割について的一致点と相違点とを明らかにし、新しいパートナーシップ構築の道筋について、率直な意見交換をすることになりました。

本シンポジウムは、本部が企画し我々が編集に努力しました「日本の水環境5 近畿編」の出版記念を兼ねています。そこで、研究者側パネリストとして、参加型民主主義形成の重要性を訴えられている京都大学の松井三郎先生とともに、本の中でNGO活動について執筆いただいた龍谷大学の竺文彦先生と神戸大学の讃岐田訓先生に、NGO側パネリストとして、関西水系連絡会事務局の本間都氏とグリーンピースジャパンの関根彩子氏に、さらに、両者の間の仲介者となるマスメディアの立場で朝日新聞大阪本社科学部の米山正寛氏に、それぞれ出席していただくことになりました。いずれも論客ぞろいので、熱のこもった議論が期待できそうです。多数の会員の出席をお願いいたします。



水環境保全をめざすNGO活動

大阪府貝塚市の近木川河口二色浜海岸でのヒラメ稚魚放流風景

世紀を越えて美しく安全な水環境を守るために 今こそ求められる市民と科学者のしなやかな連携

市民 学会：生活（くらし）感性に根ざした現実の水環境問題の提起を

学会 市民：高度な問題に対応できる科学情報の提供や市民専門家の育成を

市民シンポジウム

水環境における研究活動と市民活動の役割 ～学会とNGOに何が求められているか～

【期日】2000年9月13日(水)13:00～17:00

【場所】摂南大学寝屋川キャンパス7号館725教室（寝屋川市池田中町17-8 TEL.072-839-9102

京阪電車「寝屋川市」駅より京阪バス太間公園行約20分「摂南大学前」下車

【プログラム】パネルディスカッション

パネリスト 松井三郎（京大院・工）／竺 文彦（龍谷大・理工）／讃岐田訓（神戸大・発達科学）／
米山正寛（朝日新聞大阪・科学部）／本間 都（関西水系連絡会）／関根彩子（グリーンピースジャパン）

コーディネータ 古武家善成（兵庫県公害研）／天野耕二（立命館大・理工）

【参加料】無料

【問い合わせ先】

(社)日本水環境学会関西支部事務局 天野耕二（立命館大学理工学部環境システム工学科）

〒525-8577 草津市野路東1-1-1 TEL.077-561-2742 FAX.077-561-2667

E-mail. amano@se.ritsumei.ac.jp

古武家善成（兵庫県立公害研究所）

〒654-0037 神戸市須磨区行平町3-1-27 TEL.078-735-6911 FAX.078-735-7817

E-mail. kubuke@pref.hyogo.jp

消費者、科学者、行政が協力して問題解決を

京都大学大学院工学研究科 松井 三郎

水質汚染防止、DNA損傷性化学物質による汚染、環境ホルモン、富栄養化防止、硫黄細菌を利用した都市廃棄物物理立法の開発、硫黄細菌利用産業廃水処理など、多くの研究テーマを進める立場からこのシンポジウムで訴えたい点は、水の安全性の確保は、飲料水ばかりでなく、地球生態系を守る基本であると言

うことである。特に、魚食民族の日本人は、川、湖、海の水質汚染防止に世界の先進として取り組む責任がある。

賢い消費者と先進的な科学者、勇気を持った行政が、協力して、この難しい問題解決の道を開く必要があると考える。

市民活動に不足している力量

龍谷大学理工学部 竺 文彦

滋賀県を例に市民活動の現状を考えると、滋賀県は琵琶湖を有することから、一般的には環境問題に関心の高い県であるとされている。たとえば、富栄養化防止条例を成立させた主婦を中心とする粉石けん使用運動などが有名で、粉石けんの使用は、主婦にとって自らが環境問題に関わるわかりやすいテーマであったと言える。しかし、リンを含まない合成洗剤が広く販売されるに至り、この運動は方向性を見失っている。

滋賀県では、72のグループが県の環境ボランティア活動集（1998）に挙げられており、最大の組織は、会員数約230名の滋賀自然観察指導者連絡会である。しかし、その活動内容は自然観察会であり、直接的な環境保護の活動は行っていない。リス

トに挙げられているグループの多くは、個人を中心とした小さな組織がほとんどであって、同好の人々の集まりである。これらのグループの悩みは、組織の拡大であり、資金の問題である。100名程度以下の会員数で、会費のみで組織を運営していくのはなかなか大変である。

環境アセスメントの委員会に環境保護団体から市民の代表が入る欧米の環境保護団体と比較すると、滋賀県の例にみられるように、国内における環境保護の市民活動はまだまだその力が弱いと言える。市民への情報提供手段の確立、専門家の育成、財政的支え、会員数の拡大などが、国内の市民活動に強く求められている。

水環境問題は多岐にわたるが、大きな問題としては、埋め立てによる海洋環境の破壊とか、河川改修や広域下水道の建設による河川環境の破壊といった問題が考えられる。これらの環境破壊の要因をつくり出すのは国や自治体の公共事業である。そして、これらの環境の中で現実に生活を営んでいるのが、漁民、農民を含めた、いわゆる市民であり、市民活動は、これらの人々が自分自身の生活やいのちを守ろうとする切実な、やむにやまれぬ運動（＝住民運動）である。しかし、これらの運動は連戦連敗の歴史であった。

敗北の主たる要因は「科学論争」に持ち込まれるからだと思われる。たとえば、大阪湾でのある巨大埋め立て事業では、自

治体による「環境影響評価書」が巨額を投じて作られた。この800ページに近い評価書の中には、多項目にわたってデータが満載されている。これに対する市民の側は、基本的にデータを持ち合わせていない。これでは勝負にならず、水環境は守りきれない。

学会レベルでの研究活動としては、この市民の側の弱点を補えるかどうか、一考に値するところである。研究者の個人的支援などでは無理である。学会には多方面に渡る研究者がそろっている。ここはひとつ、強力なプロジェクトチームを編成して、「水環境を守る」という一点に絞って、調査活動を展開してみてもどうであろうか。

学会とNGOは良きパートナー

朝日新聞大阪本社科学部 米山 正寛

自然にあふれていた日本の海や川、池など水辺の環境は、経済成長の過程でどんどんと変容していった。コンクリートの構造物が増え、豊かだった生き物の姿は消えていった。しかし、ここ10年ほどは、そうした過去の動きを見直す機運も生まれている。

変化をもたらしたのは、水辺の環境を守ろうという地域に根付いた市民レベルの訴えがあったことと、それを支える科学的な研究が蓄積されるようになったためだ。こうした流れをみてみると、水環境の保全を進める社会的な条件は整いつつあるようにも思えてくる。ただし、この動きが部分的な代償措置に終

わってしまうのか、全面的な価値観の転換につながるのか、その流れを見極める必要がある。

水をめぐる環境保全の歴史の中で、研究者と市民が知恵を出し合って前進してきた部分は多い。とくに琵琶湖・淀川水系を抱える関西は、そうした動きを先駆的に実践してきた地域である。市民運動の現場をのぞくと、そこには多くの研究者の姿を見つけることもできる。将来にわたって水環境を健全に維持していくため、学会とNGOが良きパートナーとして、交流を続けていくことを期待している。

研究者の持つ情報とNGOの感性とのドッキングを

関西水系連絡会 本間 都

住民運動を進めるに当たって、内部的な問題は別として、外部的に運動の成果をあげる、つまり運動の目的を推進するためには、二つの大きな要素があると考えている。

その一つは、運動の目的が住民自身の体験や感情、言葉で語られることである。平易で誰もが実感し納得できる言葉ほど本質をつき共感を引き出せるものはない。自分の意見を自分の言葉で書いたり語ったりできる訓練も大切である。もう一つは、運動の強力な武器として独自の情報を持つこと、それもできるだけオリジナルな科学的データを持つことである。これは日本のNGOに最も欠けている点であろう。最近では、買い物ガイドや環境家計簿など、NGO自身でオリジナルデータを開発するケー

スも増えている。しかし、何と言っても、金も人も専門機関も持たないNGOにとって、科学的なオリジナルデータの収集は至難の技である。

そこで、次の提案をしたい。研究者や労働組合の持つ情報やデータと、NGOの持つ生活者としての感性のドッキングである。いわば三者の宝を共有しようということである。実際に私たちの運動では、そのやり方によって新しい動きが起こったり広がったりした例がある。住民運動と言う、いわばアマチュアの運動に対して、研究者や労働組合がどんな見方をし、どのように評価しているのか、知りたいと考えている。

「予防原則」の重要性

グリーンピースジャパン 関根 彩子

グリーンピースは、27ヶ国に支部を置く国際環境保護団体（本部：アムステルダム・オランダ）であり、その日本支部であるグリーンピース・ジャパンは、現在、核・原子力問題、森林破壊、地球温暖化、有害物質などの分野で活動している。

瀬戸内海と同様に閉鎖性の水域である地中海や五大湖、北海などでは、汚染物質の排出や放出を××年までに全廃する、といった政治目標が掲げられ、それに向けた努力が進んでいる。こうした目標の核には、因果関係に関する確実な科学的証拠が

存在していなくても、懸念するだけの十分な根拠がある場合には、それを未然に防ぐための対応をとる、という「予防原則」が存在する。しかし、日本では、瀬戸内海の例にもみられるように、特に行政担当者間でこうした未然予防の考えが乏しい。人体や食物、環境では、すでに警告を発するのに十分な証拠があがっている。強く警鐘を鳴らし、早急に汚染防止の対応を取ること、また、取らせていくことが必要である。

2000年度 支部行事だより

2000年日本水環境学会関西支部総会・講演会・懇親会のご案内

関西支部では毎年秋に総会を開催し、支部会員の交流と親睦を図っております。今年度は総会に合わせて、「大阪湾の水環境保全と新たな環境創造への課題」と題した講演会と懇親会を開催いたします。多数の方の参加申し込みを期待いたします。参加を希望される方は、11月10日までに、下記宛に葉書またはFAXにて「氏名、所属、連絡先、懇親会への参加の有無」をご記入のうえ、お申込み下さい。

【期日】2000年11月17日(金)

【場所】大阪市立環境科学研究所 2階大会議室（大阪市天王寺区東上町 8 34、JR環状線鶴橋駅、地下鉄千日前線鶴橋駅より徒歩5分。TEL 06 6771 8331、FAX 06 6772 0676）

【プログラム】1. 講演会（13：30～16：10）/大阪湾の化学物質汚染の現況と課題（大阪市立環境科学研究所・福嶋実）、大阪湾湾奥沿岸域の環境構造と生物生息環境の修復（大阪市立大学・矢持進）、大阪湾の水理構造の特徴とエスチュアリーエンジニアリング（大阪大学・中辻啓二） 総合討論

2. 水環境学会関西支部総会（16：20～17：20） 3. 懇親会（18：00～）

【参加費】総会・講演会：無料（総会後の懇親会のみ有料で会費5,000円です）

【申込・問合せ先】山本耕司、芳倉太郎（大阪市立環境科学研究所 〒543 0026 大阪市天王寺区東上町 8 34
TEL：06 6771 3246（山本）・06 6771 3374（芳倉） FAX：06 6772 0676

2000年度関西支部見学会のご案内

今回は、枚方市の淀川資料館と村野浄水場を見学します。村野浄水場は特に、日本最大級の浄水場で、高度浄水処理を含む複雑な工程で環境マネジメントシステムの構築・運営を図っていることが高く評価され、水道事業者として全国で初めて環境ISO14001を認証取得しています。また、ACT21-浄水でのより高い汚染物質除去性能の獲得、浄水施設の小型化・簡素化および管理の省力化、信頼性向上、省エネルギー・省資源、事業費の縮減を目標に、新時代の浄水技術を開発する研究 - にも取り組んでいます。

【期日】2000年10月20日(金)12：30～16：30（集合は13：30）

【見学施設】(1)建設省近畿地方建設局淀川工事事務所淀川資料館（枚方市新町 2 2 13 TEL：072 846 7131）

(2)大阪府水道部村野浄水場（枚方市村野高見台 7 2 TEL：072 840 5266）

【集合場所】淀川資料館13：30（各自で資料館を見学後、資料館駐車場に集合し、車で村野浄水場に移動）

【参加費用】1,000円（淀川資料館から村野浄水場までの交通費など） 【定員】40人

【申込・問合せ先】三浦浩之（関西大学工学部土木工学科環境工学研究室 TEL：06 6368 0939 FAX：06 6330 3770
E-mail:hmiura@kansai-u.ac.jp） または中村秀人（㈱日水コン水道本部 TEL：06 6398 1600 FAX：06 6350 5302
E-mail:nakamura_h@nissuicon.co.jp）

【申込締切】2000年10月13日(金)E-mailまたはFAXにて、参加する方の氏名、所属、連絡先（住所、電話番号、FAX番号、E-mailアドレスなど）をご記入のうえ御申込み下さい。

書籍紹介 ㈱日本水環境学会編「日本の水環境5 近畿編」(技報堂出版 ¥5,400)

本著は学会本部が企画し、各支部の責任編集で刊行されている「日本の水環境」シリーズの第2弾として今年2月に発刊されました。シリーズの特徴は、各巻の目次を統一し（目次共通タイトル/第1章：自然と水環境、第2章：歴史のなかの水環境、第3章：地域における水利用、第4章：開発と水環境、第5章：水環境の保全）、各地域の水環境や水汚染問題の歴史および現状をできる限り網羅的に収録しようとしているところにあります。また、共通の章を読むことによって、地域間の比較も容易にできるようになっています。

しかし、各巻に多少の独自色があることも事実で、本巻の場合は、第6章：阪神・淡路大震災による水環境への影響が追加されているのが最大の特徴です。本章は同震災で大きな影響を受けた関西支部の地域性を考慮して、追加が了承されたもので、支部による特別研究委員会活動（環境庁委託研究）として95、96年度に調査した結果がまとめられています。また、52名の多彩な執筆陣も、支部が総力を挙げて取り組んだ証しと言えます。

第1章では、近畿の水資源量や琵琶湖・淀川水系、大阪湾など水環境の特徴が簡潔に書かれています。第2章は、歴史的視点から水問題を捉えた特徴ある部分で、平安京での水利用や琵琶湖疏水開発の歴史など、興味深い内容が扱われています。第3章では、用水の現状や流域管理、宮水など名水の水利用が扱われています。第4章では、琵琶湖や河川、海域の有機汚濁・富栄養化、これらの水域や地下水の化学物質汚染、さらには河川水の変異原性などバイオアッセイによる毒性評価結果と汚染問題が多面的に扱われています。第5章では、水環境保全にかかわるNGO活動や住民運動論が展開されています。また、第6章は前述の通り、水環境への影響調査結果、震災時の水利用状況、水処理施設や水測定機関の被害状況が記述されています。

環境教育のテキストとして、近畿の水環境問題を考え直すきっかけとして本著をぜひご利用ください。

（兵庫県立公害研究所 古武家善成）

第34回日本水環境学会全国大会『舞台裏事情』

関西支部幹事 米田 稔

今年の3月16日～18日まで京都大学総合人間学部を会場として、第34回日本水環境学会全国大会が開催された。私は縁あって、その実行委員会の会計幹事をさせていただいたので、私の極めて個人的な立場からの実行委員会報告を書かせて頂く。

幹事会が発足したのは昨年(2019年)の5月22日、全幹事が京大に集まり、予定会場の下見をした。学生時代を含め20数年京大に通う我が身としては、各教室の変わらぬ古びた姿に誇りさえ感じた。20数年前にすでに今と同じように古びていたのである。それでも私が学生の頃は教室の黒板は糊付けされた各種ビラのため、書く場所を探すのに苦労するのが普通であったから、きれいになったものだと感心した。全国から集まる会員の方々の京大の印象はどうであったろうか。

総務兼会計幹事となり、さぞや大会までの1年は雑用に振り回されるだろうと覚悟していた私だったが、大会近くまでは正直言って気抜けするほど仕事はなかった。歴代最多の発表数となったプログラムの編成はさぞや大変だったろうと想像に難くないが、それは講演担当幹事がいつの間にかやりとげ、それに使ったアルバイト代の請求が時たま届くだけであった。アルバイト代の支払いも全て銀行振込にしたため、大学に来る途中にある銀行の自動支払機できれいに片がつく。

ポスターなどの作製は渉外担当、2000年記念ということで、かなりがんばって豪華なものにした。渉外に関して残念だったのは、懇親会の後に渉外担当が考えていたナイトツアーの案がつぶれたこと。懇親会に続いて一団で祇園に繰り出し、舞子さんと遊ぼうという案があったのだ。しかし旅行社に問い合わせると、1人数千円程度の予算では、祇園の料亭の玄関の敷居をまたぐこともできないと教えられる。残念、私も行ってみたかったのに。

会場の準備や懇親会の手配などは京大に所属する幹事の仕事。しかしこの仕事もほとんど回ってこない。どうも実行委員会幹事長の藤井先生がほとんど一人でやっているようだ。藤井先生がもし倒れたらどうなるのか、若干の不安も感じていたが、私としては楽な道を選んでしまい、全て任せきりだったと言って過言ではない。

大会が近づくとさすがに仕事が増えてきた。私の主な仕事は大会中の学生アルバイトの手配。春休み中でもありどのくらいの学生がアルバイトをしてくれるか不安だったが、京大と立命から予想以上の数の学生が協力してくれることになり、正直ほっとした。結局何人かの学生にはアルバイトを遠慮してもらうこととなったが、のべ70人ほどの学生が働いたのである。大学の最大の資産は学生というマンパワーだと本当に感じる。

大会が始まった。初日朝の受付は予想が甘かったようで、かなり混乱したらしい。私はこの間、大会本部でアルバイトの出席をとったりしていたので、その混乱の様子はよく知らず、わりと本部でのんびりしていた。本部ではコーヒー豆の焙煎から行うコーヒーメーカーが好評であった。

大会中はさしたる事件も起こらず進んでいった。講演会場の運営も学生アルバイトらがしっかり動いてくれて、滞りなく進んでいった。問題は懇親会である。実行委員会では今年は昨年の参加者数から400人規模の懇親会になると予想した。私にはこれはかなり危険な賭だと思われた。それに私が知る限り京大の近くに400人規模のパーティーができるような場所はない。そこで藤井幹事長が見つけたのが岡崎公園にある「みやこめっせ」である。ここはよく各種の大きな展示会などが開かれている会場で、私も家具の展示即売会に行ったことがある。はっきり言って大会がどの程度の赤字で終われるかは、この懇親会の参加者数の読みにかかっていた。大会1日目を終わって参加申込者は二百数十人、へたすると、懇親会収支が100万円近い赤字になるという事態も考えられる。それでも実行委員会には、赤字を出しても料理が足りないような事態だけは避けようと、キャンセルというような考えはまったくなかった。実際、前日ではもうキャンセルは間に合わない。とにかく2日目の朝、急遽、懇親会勧誘のポスターを私が作製し、講演会場でも休み時間にOHPで参加を呼びかけてもらうことにした。2日目の講演会場の後始末を私が終え、少し遅れて懇親会場に着き、受付にいた本部事務局の城さんにおそろおそろ参加者数を聞くと、ほぼ400人の参加者になったという。本当にほっとした。受付の事務局の方々もうれしそうだった。結局、懇親会費用は見事にほぼ懇親会参加費でまかなえたのである。私は個人的にはこの懇親会が今大会での最高の成功と思っている。

大会運営中の小さな事件として、暖房問題があった。大会3日目は土曜日だったが、土曜日は大学構内の暖房用スチームを動かしてもらえないことが、前日の金曜日になってわかったのである。割り増しで費用は払うからと大学事務局にかけあっても相手にされない。ここがお役所仕事の融通の利かなさだ。ストーブをレンタルし各講演会場に入れるとなると、わずかに午前中3時間程のために20万円以上の費用がかかる。天気がよければストーブは必要ないかもしれない、3時間程度なら参加者にがまんしてもらおうか、20万円を惜しんで迷ったが、結局全会場にストーブを入れることにした。はたして土曜日はいい天気。ストーブはどの程度活躍してくれたのか。少なくとも毎日寒い思いをしていた受け付けでは好評だったようだが。

大会機関中の忘れ物は本部で預かっていたが、もっとも多かったのは傘であった。結局大会後、所有者の分からない傘が二十本ほど残り、これは後始末した幹事やアルバイトらで分け合った。その内の一本は今、私の愛用の傘となっている。思えばこの傘がわたしにとっては実行委員としての記念品かもしれない。最終的に会計としての仕事の締めを行った時は5月になっていた。水環境学会史上最多の参加者となった全国大会、全国の人々が京都に対して好印象をもって帰ってくれたものと信じて、実行委員としての仕事を終える。

2000年度関西支部役員名簿

名誉支部長：(株)岩井重久

<p>顧問：合田 健 京都大学名誉教授 渡辺 弘 元兵庫県立公害研究所所長</p> <p>名誉理事：河合 章 元近畿大学農学部教授 北川 睦夫 活性炭技術研究会 駒井 豊 元大阪府立大学教授 園 欣弥 元兵庫県立工業技術センター技術開発指導員</p> <p>支部長・理事：山田 淳 立命館大学理工学部</p> <p>理事：阿部 富彌 和歌山県衛生公害研究センター 井上 頼輝 福井工業大学工学部 岩島 昭夫 京都府保健環境研究所 海老瀬潜一 摂南大学工学部 小田 國雄 大坂薫英女子短期大学 金子 光美 摂南大学工学部 國松 孝男 滋賀県立大学環境科学部 宗宮 功 京都大学大学院工学研究科 寺島 泰 京都大学大学院工学研究科 中村 正久 摂南大学薬学部 中本 雅雄 エヌエス環境株式会社大阪支店 平田 健正 和歌山大学システム工学部 松井 三郎 京都大学大学院工学研究科 盛岡 通 大阪大学大学院工学研究科 矢野 洋 神戸市水道局水質試験所 和田 安彦 関西大学工学部</p> <p>監事：東 国茂 通産省工業技術院大阪工業研究所</p> <p>幹事長：天野 耕二 立命館大学理工学部</p> <p>幹事：飯田 博 (財)関西環境管理技術センター 池 道彦 大阪大学大学院工学研究科 海老瀬潜一 摂南大学工学部 大地 正憲 (株)クリアス本社設計部 笠原 伸介 大阪工業大学工学部 貫上 佳則 大阪市立大学工学部 古武家善成 兵庫県立公害研究所 澤井 正和 (株)川崎重工業環境事業部 須戸 幹 滋賀県立大学環境科学部 田中 英樹 兵庫県立衛生研究所 中島 元生 (財)ひょうご環境創造協会環境科学技術部 中野 武 兵庫県立公害研究所 三浦 浩之 関西大学工学部 山田 春美 京都大学大学院工学研究科 山村 優 寝屋川南部広域下水道組合 芳倉 太郎 大阪市立環境科学研究所</p>	<p>宇野 源太 元大阪工業大学教授</p> <p>川島 晋 大阪工業大学名誉教授 北村 弘行 (株)瀬戸内海環境保全協会 佐谷戸安好 元摂南大学学長 永井迪夫元 (財)関西環境管理技術センター</p> <p>副支部長・理事：福永 勲 大阪市立環境科学研究所</p> <p>石川 宗孝 大阪工業大学工学部 今井 俊介 奈良県衛生研究所 鶴川 昌弘 大阪府立公衆衛生研究所 奥野 年秀 (財)ひょうご環境創造協会参与 川村 隆 兵庫県立公害研究所 川合真一郎 神戸女学院大学人間科学部 杉田 隆博 大阪市立環境科学研究所 津野 洋 京都大学大学院工学研究科 中島 淳 立命館大学理工学部 中室 克彦 摂南大学薬学部 野村 潔 滋賀県立衛生環境センター 藤田 正憲 大阪大学大学院工学研究科 村岡 浩爾 大阪産業大学 森澤 眞輔 京都大学大学院工学研究科 山中 芳夫 大阪学院大学経営科学部</p> <p>犬島 和夫 (株)クボタ環境研究部</p> <p>井伊 博行 和歌山大学システム工学部 上野 仁 摂南大学薬学部 大久保卓也 滋賀県琵琶湖研究所 奥村 為男 大阪府立公害監視センター 門口 敬子 (財)関西環境管理技術センター 紀本 岳志 (株)環境理化学研究所 坂本 明弘 和歌山県衛生公害研究センター 竺 文彦 龍谷大学理工学部 高原 信幸 神戸市環境保健研究所 筒井 剛毅 京都府保健環境研究所 中野 一郎 (株)クボタ環境研究部 中村 秀人 (株)日水コン水道本部 矢野 洋 神戸市水道局水質試験所 山林 右二 東大阪市公害監視センター 山本 耕司 大阪市立環境科学研究所 米田 稔 京都大学大学院工学研究科</p>
---	---

『かんすい』では支部会員の皆様方からの寄稿をお待ちしております。支部会員からの近況、美しい水環境や興味ある処理施設のご紹介や写真、海外体験記など、関西支部宛てお送り下さい。